2022年度 第１回豊岡市地方創生戦略会議 会議録（要旨）

○開催日時　2022年６月６日（月）午後２時00分～午後４時30分
○開催場所　豊岡市役所本庁舎 庁議室
○出席委員　関貫座長、中嶋副座長、嶋委員、平田委員、太田垣委員、岡本委員、森田委員、太田委員、佐伯委員、永田委員、西垣（義）委員、高宮委員、森委員、西垣（由）委員
○欠席委員　宮崎委員、木村委員、古橋委員
○傍 聴 者　24名

１　開会

２　関貫座長（市長）あいさつ

座長　地方創生という言葉が出てから久しいもので、この間、国は地方創生に関する補助金等を出し、各自治体はいろいろなことを考え、実行していくことが続いています。データで見ると、人口減少対策で行ってきたことの成果として人口が増えてきたかというと、なかなかそういった現象は見えていません。

昨年の出生数が発表されましたが、84万人と毎年過去最少が続いています。かつては100万人以上でしたが、それを大きく下回っているというのが昨今の状況です。

国全体の人口が減少していく傾向が出ている中で、全体を増やしていくのか、それとも人口の配置、構成を変えていくのか、そういったことが国において議論の対象になっているとは感じられないので、さみしい気がします。

豊岡市としては、とにかく人口減少を抑えるという思いを強く持ちながら、この会議をやっていけたらと思います。

３　報告事項

⑴　2020年国勢調査結果の分析

副座長　2020年国勢調査は2020年10月1日現在の調査結果で、速報値はすぐに出るのですが、そこから詳細な集計や分析等が入って、２年くらいしてようやく結果が出てきました。先週あたりにも新しいデータが出てきて今日も含めていますので、改めて結果を見ていただければと思います。

資料の最後の表を見ていただきたいのですが、今回は但馬地域と京都の中丹地域・丹後地域を比較するような数値を入れています。人口を見ていただくと、2010年と2020年、それから2040年の推計をお見せしています。

この地方創生戦略会議も２期目に入っていますが、10年前に85,500人ほどいた人口が、2020年の確定値で77,489人ということで、この10年間の累積で豊岡市では9.5％の人口減少がありました。但馬のほかの自治体と比較すると、豊岡市がやや減少は小さかったといえます。

2040年の推計では、豊岡市は25％の減少、その他の但馬の自治体についても25％から35％くらいまでの非常に大きな減少を見通しています。一方で、京都府北部の自治体も並べて比較できるようにしてありますが、今日は最後に隣の福知山市との比較を少ししてみたいと思っています。

福知山市は、10年前は79,600人、2020年は77,000人ということなので、実はちょうど今、福知山市と豊岡市は人口規模で並んだような状態にあります。福知山市は10年前から３％ほど人口が減少していて、今後20年間で10％ほどの人口減少を見通しているということで、豊岡市がまさに目指そうとしている人口動態の実例が実は隣のまちにありまして、人のふり見て我がふりをということで、今日は福知山の数字を少し見ていただこうと思っています。

先ほど座長の言葉の中にもありましたように、６月３日に2021年の１年間の出生数が発表になりまして、また最小の数値を更新してしまったということです。ただ、コロナ禍も2020年から３年目に入ってきたわけですが、中長期的には減少傾向にあることは間違いないのですが、そこにコロナ禍の影響が重なってきているということが、皆さんの周りの方の経験などと照らし合わせてみても直感的に理解していただけると思います。結婚を控えたり、「この時期に子どもなんて」と控えたりして、コロナ禍においては産み控えがされているだろうということで、豊岡市では2020年だけでも１割ほど出生数が減少しました。

コロナがいつまで続くのかということはわかりませんが、ポストコロナにおける期待的観測としては、控えていたものを「じゃあそろそろ」といっていただければありがたいのですが、コロナ禍前の状況に本格的に戻ってきたところで、若者たちが自分たちの結婚や出産・子育てについてどういった中長期的な見通しを持っているかによっては、コロナ禍に落ちてしまった状態が常態化してしまうということも起こりうるのではないかと心配しています。

地域経済や社会としても、コロナ禍が明けてきたときに「さあもう一回頑張ろう」というような力強いＶ字回復を見せないと、出生数の大きな減少はこれからも続くのではないかと少し懸念しています。

２枚目のスライドですが、この会議ではおなじみになってきた、若者回復率という数値です。10歳代の高校卒業時に進学や就職でどっと転出超過が起こり、大学を卒業した時点で一定割合の人たちがＵターンしてくる、あるいは、そのタイミングで豊岡市へＩターン・Ｊターンする人たちが入ってくることによって部分的に回復する、というパターンを数値で表したものです。最新の2020年国勢調査結果の数値では、男女平均が35.3％ですので、10代で減少した分を３分の１ほど取り戻している状態ということです。引き続き男女差が明確にありまして、男性は41.6％、女性は28.5％となっています。３枚目の時系列で見ていただくとどういった動きになっているのかということや背景にある要因について理解していただけると思います。

前回の2010年から2015年の５年間の数値については、男性が52.2％で女性が26.7％、合わせて39.5％ということで４割程度回復しているという状態だったの

ですが、今回は男性が10％ほど落ちていて女性はほぼフラット、男女平均で４％ほど落ちているという状況です。

これをどう見るかということですが、要因としては三つを頭に入れておいていただければと思います。豊岡市はこういった形で頑張っているわけですが、小さなまちですので、外部要因が非常に強いです。この2015年から2020年の５年間というのは、確かに2020年以降の記憶が非常に強いわけですが、振り返ると2017年から2019年あたりまでは非常に好景気が続いていて、都市部の大企業の採用熱が高かった時期でした。こういった時期には地方から特に男性がどっと流出する傾向が顕著に見られ、2015年から2019年にかけてだいぶ流出した後、なんとか2020年のコロナ禍で少し鈍った、戻ったのですが、差し引きするとやはり男性はこの５年間で相当多く流出しているという状況にあります。

女性の場合は景気の良し悪しの影響を受けにくい部分があり、当然、好景気時には女性も大都市・大企業がこぞって採用しようとしますが、景気が悪くなっても、今度は正規雇用を控える代替要員として非正規の女性を採用するといったことが行われていますので、いずれにしても女性は大都市・大企業で安定的に雇用される傾向にあります。よって、本人たちの戻る・戻らないといった意思に関わらず大都市では需要が非常に大きいということがあり、男性は景気の波に大きく揺さぶられていますが、女性の回復率が比較的フラットなのはそういった理由があります。それから、ジェンダーギャップの面で、常に男性の回復率のほうが高く女性が低いという状況が変わらずあるということです。

最後に外国人の移動の影響についてです。これは今、全国的に注目され始めていますので、内閣府や総務省なども十分意識していて、地方創生の文脈でもできる限りそのあたりは注意しながらやってほしいということで、データの集計や公開も10年前くらいと比べるとずいぶん丁寧にやってくれるようになり、こういったことも計算できるようになってきました。

４枚目のスライドは、豊岡市の最新の回復率を日本人と外国人の動きで分けて、転入してくる20歳代の外国人によってどの程度押し上げられているのかということを計算したものです。男性は全体で41.6％ですが、そのうち３％が主に技能実習生の20歳代の外国人によるもの、女性は全体で28.5％ですが、そのうち5.2％が外国人の転入超過によるものだということですので、外国人による押上効果というのは女性のほうが高いということです。

この場でも過去何度か指摘したことがありますが、ジェンダーギャップだけではないですが、そのこともあって女性の回復率が低い状態なのですが、おそらく表面的に見えている数値よりも深刻で、その深刻というのは、実は外国人によって回復率は押し上げられているので、日本人で豊岡市に帰ってきている人というのは、本当はもっと少ないということです。

今日のもう一つの話題は、但馬地域と京都府北部の二つの地域との比較をやってみようということです。

回復率のパターンを五つに整理分類してみました。まず一つ目は若者回復率

10％未満の“完全流出型”。二つ目は豊岡市が該当しますが、回復率10％以上100％未満の“部分回復型”。三つ目は、唯一福知山市のみを挙げていますが、回復率100％以上の“地域拠点・産業都市型”。四つ目は、参考でどれほど違うかということを見ていただこうと思い“地域拠点・学園都市型”ということで、神戸市と京都市を入れました。五つ目は“超大都市型”で、おそらく日本中探しても東京と大阪しか当てはまらないと思いますが、いかにこういった大都市へ一極集中しているか、他の自治体と若者の移動パターンが異なっているかということを見ていただけると思います。

“完全流出型”は養父市と香美町、新温泉町で、養父市で男性が少しだけ回復していますが、全体では6.3％しか回復していませんし、香美町、新温泉町では、10代で大きく流出させて、20代でももう一回送り出すというようなパターンを持っています。

我々が見慣れている“部分回復型”は、10代で大きく流出させた後、その一定割合、豊岡だと約三分の一ですが、朝来市が約17％ですので五分の一程度回復しているといったパターンです。

福知山市は、豊岡市と同じで10代である程度の流出は見られるのですが、20代でそれ以上の転入があるという非常にうらやましいまちで、回復率が約180％ですので、10代での流出分を回復して余りあるといったまちが、実は隣にあるということです。この中にはもちろん豊岡市から福知山市へ流出している若者もいて、主に接している但東町からということになると思います。

この兵庫北部、それから京都北部の大きな若者流出の受け皿となっている三都市、大阪市・京都市・神戸市がどのようなパターンを持っているかというと、「若者回復率が当てはまらない」ということです。若者回復率は、10代で流出して20代でどう回復するのかを表している数値ですので、例えば神戸市を見ていただくと、10代で大きな転入超過が起こって、20代で転出超過に切り替わるということで、豊岡市とは逆のパターンを持つまちです。それから、もっと大きく受け入れて大きく送り出す京都市のようなパターンも含みます。

“超大都市型”の大阪市は一切流出がなく、10代でも20代でもどんどん若者が集まっています。30代前半の、大学卒業後10年くらい働いていた人たちが、結婚や子育てのタイミングでもう少し落ち着いた広いところに住もうということで、南側であれば奈良あたりのベットタウンへ移動するし、西側であれば尼崎・西宮・神戸・明石といったあたりへ移動するといったパターンが見られますので、少しだけ30代で減少しています。

高等教育機関があるところでは10代で大きく若者を受け入れているということで、比較表も載せています。大学・大学院・短大の数は京都市が39、神戸市が24、大阪市が19。学生数は京都市が14.4万人、神戸市が７万人、大阪市が３万人ということで、これには専門学校等は含まれていませんので、実際にはこれ以上の若者たちがこういった大きなまちに集まってきているということです。

兵庫北部と京都北部の自治体が、外国人の移動の影響をどれくらい受けている

のかというのを比較したのが13枚目のスライドです。豊岡市周辺では、相対的に福知山市が非常に大きな外国人の若者の受入れ地となっていて、あとは綾部市や舞鶴市あたりといったところです。比較すると但馬はまだあまり多くないということになっています。

ジェンダーギャップの観点から、14枚目のスライドでは男性の回復率から女性の回復率を引いた値を並べています。福知山市と舞鶴市は産業構造的に非常に特殊ですので除くと、豊岡市はやや男性のほうが多くなっていますが、共通しているのは、大体どの自治体も回復率というのは男性のほうが高くなるものだという図になっています。

最後に福知山市との比較です。隣のまちでは人口動態が非常に良好で、豊岡市も部分的にでも真似したいですが、実は福知山市にはほかにも興味深い部分があるので、資料を作ってきました。

福知山市は2016年４月に私立大学を公立化するというかなり変わったチャレンジをしていて、私立大学を福知山市が買って公立大学にして、尚且つ大きくしました。情報学科などが追加されて、まだ全定員が満たされていませんが、満たされたときには豊岡市に新設された兵庫県立の専門職大学の倍くらいの規模になります。この公立化の前と後で基本的な構造が変わっているわけではないのですが、やはり数百人規模の学生たちが10代で入ってくるということになると、最初の10代の谷が少し浅くなる、流出が少し食い止められるわけですね。それから、入ってきた学生たちがみんな就職で福知山の外に出てしまうと、流出が20代で増えますので回復の山が低くなることが考えられるのですが、あまり変わっていません。大学を卒業して就職する学生が一定割合地域経済に対して貢献している、卒業生たちを地元の人材として使っていただいているという点で貢献しているということなのかなと思います。

次は、福知山市と豊岡市の産業別の就業者数の比較を見ていただきます。基本的には非常に似ていて、高齢者が少しだけやっているというのが１次産業で、２次産業をやっている人というのが一定数いて、やはり一番大きい割合で就業者がいるのが３次産業。両市とも就業者の人数から見た構造は似ていて、あえて言うなら、やや福知山市ほうが若者のところが少し出っ張っています。それだけ若者たちが20代で帰ってきて就職しているという状況です。

20代に絞ってもう少し細かく産業別に見てみます。20代が福知山市あるいは豊岡市へ帰ってきたときにどういった産業に就業しているのかを、男女別に分けて表示しています。これも非常に似ていて、トップは「製造業」で次に「医療，福祉」、福知山市の場合は「公務」というのが３番目に並びますが、これは自衛隊の基地がある関係で、男性が圧倒的に多くて女性は少しだけというのはそういう意味です。豊岡市は「宿泊業，飲食サービス業」が上にあって、やはり観光のまちだなという印象です。

これだけ見ると産業構造的にもどういった産業が中心になって若者を吸収しているのかという意味でも、似ているといえば似ているのですが、福知山市の場合

は歴史的なアドバンテージのようなものがあって、昔から交通・交易の要衝として行きかう人・モノがあってということがありますし、それから軍の影響ですね。製造業がトップになっていますが、私もよく知らなかったので今回調べてみると、今でも40社ほどの大きな企業が工業団地で製造していて、約６千人がそこで就業しているということで、福知山市の６人に１人くらいは工業団地で働いています。もともと陸軍の演習地で何もない野原だったところを1970年代から工業団地に変えて、そこへ大企業を次々と誘致したという、その当時から脈々と続いているものが今もあるということです。

そういった歴史的なアドバンテージもあって強い産業を持っているということと、いろんな仕事のバラエティがこのまちにはあって、サービス業なども非常に盛んですし、兵庫北部と京都北部の中でもかなり中心的な商業のまちであることは間違いなくて、医療や福祉なども盛んだということで、女性の吸収もしっかりやっているということです。

福知山市は出生率も非常に高くて、豊岡市は今1.7くらいだったかと思いますが、福知山市は2.0くらいで0.3ポイントほど高いということです。全国の中でも相当高いほうで、内閣官房が地方創生事業をやっていく中で、比較的出生率の高い注目するケースの13の自治体を選んで分析したレポートを出したことがありますが、そこにも福知山市は含まれています。

なぜこのような高い出生率を保てているのかという話の中で、未婚率が比較的低いということや親との近居が多い、市の中心地に向かって保育所が整備されているので、通勤しながら子どもを預けられて仕事と育児を両立させやすい、地域コミュニティの結びつきが強いといったことが挙がっていました。あとは先ほど申しあげたとおりですが、北近畿の中心都市として多くのチェーン店が進出している、陸上自衛隊や行政機関の立地、工業団地もあって多様な業種が集積して雇用を生んでいる、就業支援や子育て支援なども一生懸命やっているということのようです。

こういった、若者回復率が約180％に上っている、出生率も2.0ということが合わさるとどうなるのかということですが、1970年から2020年までの50年間で見ると、もともと豊岡市が95,000人ほど、福知山市は77,000人くらいのまちで、豊岡市のほうが２万人ほど多かったのですが、この50年で追いつかれました。ちょうど2020年に77,000人のところでピタッと両市の人口規模がそろいました。ここからどうなるのかということなのですが、比較の表で見ていただいたとおり、福知山市は2040年で69,000人くらい、今後20年間で約１万人の減少を見通しているということですが、豊岡市の場合は約２万人ということで、ここから先は大きな差が両市には見られるということになります。

先ほどの五つの分類で、突然豊岡市が“部分回復型”から福知山市のような“地域拠点・産業都市型”になるのは難しいと思いますが、なんとか回復率を今の35％から70％や80％へ引き上げる、出生率も上げていきたいと思っているところです。出生数のところで産み控えという話がありましたが、短期的には産み控えですが、

有配偶者の出産行動というのはそれほど大きく痛手を受けているわけではありませんので、一番痛いところとしては未婚率が高まってきているというところで、福知山市とはここで大きく離されているのかなと思っています。

座長　　ありがとうございました。話の内容としてはしゅんとしてしまうようなものでしたが、それに負けず頑張っていくことが必要かと思います。

⑵　開学２年目となる芸術文化観光専門職大学について

Ａ委員　　大学は学年定員が80人、全学で320人になっています。一学年80人の小さな大学ですが、今、豊岡市内で生まれる子どもの数が500人を切り、その７割がいったん市外に出るわけですので、19歳人口というのは150人程度なわけです。この150人のところに毎年80人全国から学生が来てくれるということです。もう少しショッキングな数字を申し上げますと、豊岡高校は今年198名の卒業生がありましたが、豊岡に残ったのは４名だけで、194名が外に出ています。４名のうちの２名が本学へ進学してくれました。おそらく近大も同じような数字かと思いますので、非常に深刻な事態と思っています。

大学については、ご存じの方も多いかと思いますが、図書館やカフェなどは開放していますので、ぜひ日ごろから足を運んでいただければと思います。

学生は、１年次は全員が寮に入ります。個室の４人で１ユニットとなり、キッチンやシャワールームなどを共有します。２年次は外に出ますので、この４月に１期生80人がアパートやシェアハウスなどに住み始めたところです。

特徴としては、本学はクォーター制になっていて、夏休みと冬休みにインターンや短期留学、集中講義を入れています。１期生である２年生は、今年は城崎の旅館などに１か月程度の実習に入ります。新温泉町の夢ホールの運営のお手伝いやＪＲ西日本、京都丹後鉄道、神鍋高原と地域や企業の商品開発のお手伝いをして、単なるインターンや職場体験ではない、非常に中身の濃い実習をさせていただいています。それ以外として、リサーチ・アンド・イノベーションセンターで自治体のまちづくり・政策立案のお手伝いや企業の商品開発のお手伝いなどもしています。

それから、但馬圏域にある17の高校のすべてで演劇的手法を使ったコミュニケーション教育を行っています。これは、一つには大学入試改革が進んでいて、私立ですと半分以上の学生がＡＯ推薦で入学しています。東京の中高一貫校などはこれに即した授業をしているのですが、ＡＯ入試が一芸入試などと言われていたのはもう20年くらい前の話で、今は特にトップ校の慶応などではＡＯ入試が一番優秀な学生が入るんですね。豊岡高校も３年前までは国公立でＡＯ推薦を使う学生は数名でしたが、おととしこれが急に50名に増えて、二十数名がこれで合格しました。

実はこのＡＯ推薦というのは、どこの大学でも各校に１人ないし２人の枠を配っていますので、小規模校のほうが実は有利なんです。どこの大学も地方からの学生を取りたい。ただ、ＡＯの推薦ではコミュニケーション能力が問われる試験

が多くなってきていて、地方校はここが弱い。そこにテコ入れをして、但馬から高いレベルの国公立にどんどん学生を入れていこうと。浜坂高校などもすごく頑張っていて、ここ数年毎年のように九大や阪大に一人ずつは入れています。そういった教育改革のお手伝いを本学の教員たちが担当していて、大学ができるとこういうことが地域でできるようになるということです。

リサーチ・アンド・イノベーションセンターは、３市２町から様々な依頼を受けまして、１年目で19の事業、それ以外に企業連携が二つ、企業との連携協定を七つ結びまして、これまで大学がなくてできなかった様々なこと、例えばアンケート一つ取るにしても、非常に優秀な学生たちがすぐに行っていろいろなアドバイスができるということで、大変好評を頂いています。

今年からはいよいよ海外への留学、それから交換留学先をどんどん増やしているところで、中国・韓国・ドイツ・カナダ・オーストラリアなどへの留学プログラムを進めているところです。受け入れるほうでも今後広げていく予定です。

募集状況ですが、１年目は異常な倍率になりまして、これは私たちも予想外だったのですが、反動が出たのと偏差値が思った以上に高くなりまして、一番高いところだと65くらいです。公立で65というと、京都府立大や大阪公立大とほぼ並ぶような偏差値になってしまいました。今年の倍率は少し下がりまして3.5倍となっていますが、比較的高い倍率をキープしています。特徴として、全国の様々な学校から来ています。兵庫県立大は学生の６割が兵庫県から、８割が関西圏からですが、本学は兵庫県から２割、関西圏からは３割で、兵庫県の次に多いのが大阪でも岡山でもなく北海道で、今年は７人入りました。次が岩手県で５名。小さな自治体からの志願者が多くて、これは福知山公立大の先生に伺っても、福知山公立大も周辺自治体以外では人口10万人から20万人前後の小さな自治体から来ると言っておられました。本学も関東圏からは少ないです。関東圏には本学と競合するような芸術系の大学が多いので、岩手県の高校生からすれば、東京に行くのも豊岡に行くのも同じなんですね。競合校の統計も取っていますが、日大の芸術学部や静岡にも県立の文化芸術大学がありますが、そういったところと両方受かっても、ほとんどの学生が本学を選んでくれていて、学生の約85％が本学を第一志望にしています。

秋田の国際教養大や福島の会津大といった、オンリーワンの公立大学というのが非常に注目を集めていて、そのうちの一つに本学も数えていただいているということで、今のところは非常に成長できているのかなと思っています。

本学の売りは演劇とダンス、それに観光が本格的に学べる公立大学ということですが、志望理由の多くが公立大学であるということと、芸術と観光の両方が学べるということが、入学後のアンケート調査で一番になっています。簡単に言うと、今どき自分の子どもが演劇やダンスをやることを頭ごなしに反対する親はあまりいないんですね。不登校や非行に走るよりは楽しく大学生活を送ってもらいたい、でも就職は心配。本学は観光という鉄板の就職先がありますので、実は志願を考えた最初の動機というアンケートも取っているのですが、３割が親から勧

められた、２割以上が教員から勧められたということで、これは広報戦略でも成功してきたかなと思っています。

なぜ観光と芸術なのかとよく言われるのですが、アジアの諸外国では文化施策と観光施策は同じ省庁が行っているんですね。日本だけが文化庁が文部科学省、観光庁が国土交通省と全く違う省庁でやっているんです。インバウンドもコロナ以前に戻りつつあるわけですが、最大の要因は円安と東アジアの経済発展ですね。もちろん観光業の皆さんの大変な努力があったわけですが、やはりこの外的な要因が大きい。今、中国と東南アジアに10億人近い中間層が生まれようとしています。年間所得が大体300万から400万を超えると海外旅行へ出かけます。70年代・80年代の日本人がそうでしたし、90年代の韓国の方々もそうでした。初めて行く海外旅行先として安くて近くて安心・安全な日本を選んでくださったわけですが、もう一度来てもらうためには、富士山へ何度も行きたいという人はあまりいませんので、スポーツや食文化も含めたコンテンツが重要になります。これは観光学の世界では文化観光と呼ぶわけですが、その中でも特に日本が弱いのが夜の時間帯のエンターテインメント、ナイトカルチャーやナイトアミューズメントです。

本学としては、文化観光の中でも特に芸術文化の部分のスペシャリストを育成していこうということで、このあたりが志願者の共感を得た部分かなと思っています。

大学は地方創生の最後の切り札かと思いますが、大学を作ればいいというものではなく、本当に少子化でどの大学も大変なんですね。本学と同じ昨年４月に、高松市にせとうち観光専門職短期大学が開学しました。ここは私学ですが、高松市が空いていた巨大な宿泊研修施設を校舎としてすべて提供して、本学よりも大きさとしては大きいです。そこも本学と同じ80人の定員ですが、初年度の入学者は16名でした。それくらい大変なものですので、ぜひ自治体や地域の皆さんの温かいご協力をお願いしたいと思っています。

やはり足元も大事ですので、但馬からの志願者も増やそうということで、今年は豊岡高校から２名、浜坂高校から１名進学してくださいましたが、教育委員会とも連携して、豊岡市内では中学３年生の全員に本学に来て私の授業を30分受けていただいて、施設も見学していただきます。もちろん、本学は特殊な大学ですので、全員が志願するということにはなりませんが、やはり大学ができると大学進学率が上がるという統計があります。それは若者が大学に来るかどうかではなくて、大学生が身近にいるかどうかで大学進学率がすごく上がるんです。なので、豊岡の教育全体の底上げにも寄与できるのではないかと思っていますし、ほかの２市２町に聞いても志願者はいると伺っていますので、もう少し但馬からの志願者も増えるのではないかと思っています。

課題は地域にどれくらい残るかです。学長の責任で全国から学生を集めてきます。おそらく、まだしばらくはこの倍率を保てると思います。４年間鍛えて出します。ただ、彼ら彼女らが残ってくれるかどうかは、どちらかというと地域の皆さんの責任なのではないかと思っています。１か月のインターンで市役所にも行

きますし、旅館にも行きますが、そのときに豊岡市や豊岡市の観光業が魅力的な産業に映るかどうかです。先ほど申し上げた高松の観光専門職短期大学を見ても、要するに18歳の高校生にとって、観光だけでは観光業はまだ魅力的な職業ではないんです。観光とアートを結び付けたのでこれだけの人気が出たということなので、ここが一つの大きなポイントかなと思っています。

ポジティブなところでは、今、大学院の設置を検討しています。そうするともう２年長くいることになりますので、６年いるとそのままいてくれる可能性が高くなるのではないかなと思っています。仕事をしながらでも大学は続けられますので。それから社会人枠が増えていまして、兵庫教育大などもそうですが、休職して２年間大学院に行くという人が増えています。非常に優秀な教員がそろっている本学で大学院が設置できれば、社会人枠も取り込めるのではないかと思っています。

それから、４年間は変えられませんが、その後検討して学部・学科の再編や、できれば定員増を狙いたい。やはり定員増が何よりの人口減少対策であることは間違いないので。ただ、これは県との交渉になりますので、３市２町の首長には足並みをそろえていただいて、本学と一緒に県へ請願をしていくという方向でぜひお願いしたいと思います。

その中で、やはり留学生を多く取りたいと考えています。今、中国で日本語を２年勉強して、３年から日本の大学に編入して日本で卒業するという学生が増えているんです。そうすると、中国と日本の両方の大学の卒業証書がもらえて、それで就職するとビザが非常に取りやすくなります。そのまま定着してもらえれば、定住や帰化というところにまで結び付けていけるので、この枠をできれば増やしていきたい。今の定員は80名ですが、100名くらいまでは受け入れられます。それ以上となると校舎を増設するか分校を作るか、あるいは観光と芸術を分けて３年次からは分校にするといったことで可能だと思います。寮も今の状態でいっぱいなので、留学生を受け入れるためには寮も新設しなければならず、様々な課題はありますが、こういったことで地域の人口減少対策に少しでも寄与できればと思っています。

以前、４割なら相当寄与する、２割でもまあまあ、というようなことが３年前にありました。そのときになかった要因が一つあって、１期生は80％、２期生は85％が女子の学生です。豊岡にとって喉から手が出るほど欲しい20歳前後の女性が、全国から来てくれる。恋愛も結婚も個人の自由ですが、統計上は女性がいなければ未婚率も何もないわけですから、本当に彼女たちがどれだけ残ってくれるかですね。ぜひ本学の今の状況を地域創生に生かしていただければと思います。

⑶　地域おこし協力隊の推進について

事務局　　地域おこし協力隊というのは国の制度で「三方よし」の取組みを目指しています。協力隊としては自己実現や地方での暮らしができる、地域としては新しい人が入ってきて活性化できる、地方公共団体としては役所の仕事だけではできない

ようなことに取り組める、ということです。おおむね豊岡市もこういった感じで推進できているのではないかと考えています。

地域おこし協力隊は、特別交付税を財源として運営しています。地域おこし協力隊の活動に要する経費は１人あたり480万円で、そのうち人件費が280万円、その他の経費が200万円です。豊岡市の場合は、その他の経費として家賃や車に対する支援、事業機器の借り上げという形で、大体月に10万円くらいを充てていて、280万円を12か月で割った23万３千円プラス10万円の33万３千円くらいを、１人あたりに交付しています。残った70万円くらいが活動費としていろいろな地域活動で使われています。そのほか、自治体に対して、募集に要する経費やおためし協力隊に要する経費などにも100万円から200万円が交付されていて、これらをうまく使いながら推進していくということで、総務省は、2024年度までに協力隊を８千人にすると強く推進しています。豊岡市の状況は現役の隊員が45名で、そのうち、一般的なミッション型が41名、起業を前提とした協力隊が４名です。採用が決定してこれから来られる方も１名います。地域の方々から、協力隊にはどんな方がいてどんな活動をしているのかをもっと明示してほしいということがありましたので、「飛んでるローカル豊岡」に特設サイトを作ったり、市の広報やフェイスブックで紹介したりもしています。

ほかの自治体と比べた状況ですが、2021年度の特別交付税の算定ベースで、豊岡市は全国で５番目となっています。兵庫県下ではほとんどが但馬の自治体で、豊岡がダントツで１位となっています。

今年度から、市の直接執行から委託型にしたり、活動報告などのＤＸ化を図ったりして、業務効率化のようなことにも取り組んでいます。

募集・委嘱の状況は資料のとおりです。2019年度にはミスマッチを減らしたいと思い、定住している隊員の調査を行いました。すると、定住されている方は複数人から選ばれているという傾向があって、それなら応募者数を増やして選考するということをすればミスマッチを防ぐことにつながるのではないかと思い、移住スカウトサービスの「ＳＭＯＵＴ」というサイトも活用しながら募集を行いました。2021年度の倍率は4.8倍となっていて、やはり４、５人から選ばれた人というのは、それなりに優秀であったり思いを持っていたりする人であると思います。

現役協力隊の面白い活動事例を紹介します。いろいろな協力隊同士でコラボして活動をされていて、演劇祭の協力隊と麦わら細工の協力隊が、共同企画のような形で今年度の演劇祭のオリジナルグッズを作っていたり、市街地の協力隊と情報発信を主としている協力隊でチームを結成して、ナイトマーケットの企画運営をしたりしています。また、空き店舗ハラマキビルは、協力隊４名と市民の方１名の５名で、15年くらい使われていなかったビルを共同で借りてコミュニティスペースにしようと、ＤＩＹでされています。そのほか、青空市場を残していくために何かできないかということをみんなで考えたり、竹野の海町マーケットでは情報発信やポスター制作といったスキルの部分でコラボしたり、但東の大石家ではどう活用していったら面白くなるかということを一緒に考えたりしています。

次に定住の状況です。総務省が出している全国の状況ですが、３年の活動終了後、近隣自治体も含めて定住したのがおよそ65％、そのうち同一市町村に定住したのが53％です。同一市町村に定住した53％のうちの約４割が起業しています。豊岡の現状が次のとおりです。純粋な定住率では56％、今まで任期を満了したのが32人で、そのうち18人が起業や就業をして残っているということです。３年任期満了後の定住率94％というのが、全国でいうところの53％にあたり、３年を終えた方はほとんどがこちらに定住しています。

今後についてですが、50人を目途に積極的に推進していこうということで、６月と12月にそれぞれ募集を考えているところです。また、ミスマッチをなくすために、インターンのような体験的な企画もやっていこうと思っています。定住と起業の支援の部分については、起業相談所の「ＩＰＰＯ」を積極的に活用してもらうことや、起業補助金も特別交付税100万円プラス市の特別会計でも100万円ということでやっていますので、ここも継続していきたいと思っています。伝統工芸の出石焼や麦わら細工の協力隊もいるのですが、そういった方々の売り先を確保することや、ブランディングのようなことも必要ではないかと思います。また、協力隊の空き家活用を推進することで、地域とのつながりが生まれやすくなったり定着率の向上につながったりするのではないかと考えています。

⑷　2021年度地方創生事業の実績

＜事務局より資料４～７に基づき説明＞

４　意見交換

座長　　皆さんから質問・意見等がございましたらどうぞ。

Ｂ委員　　おんぷの祭典の実行委員をさせていただきまして、専門職大学の学生と休憩時間に話をさせていただく機会がありました。新１年生の学生が５、６名くらい来てくれていましたが、「１期生にはバイトがあって、私たちの分がない」という話を聞きました。私も商業者ですので、年間通してそんなに仕事があるかなと思うのですが、よく考えたら、農繁期に助けてもらえたらとか、観光協会や製造業も持ち寄ってみんなで助け合えればというようなことを考えながら帰ってきました。すごく明るい子たちで、本当に受付の場所が華やかになって、１日明るく過ごせました。ああいうことが各事業所で広がっていけば、大学ができた実感がすごく持てるのではないかなとか、あと、私たちがバイト先を紹介するようなポジションになれたらなと思いました。

座長　　バイトの数がないという話がありましたが。

Ａ委員　　実際の数値は大学に帰ってアンケートを取ろうと思いますが、１年生はちょっと忙しいものですから。勉強をすごくしないといけない大学なので。そうすると、できる時間帯も限られますので合うバイトがないということがあります。城崎の旅館でバイトをさせていただいている学生もいますので、徐々にそこは融合できていくかなと思っています。

本学は一般入試でも集団面接等でコミュニケーション能力を問う試験が入っていて、そういった能力は高い学生がそろっていますので、そこは市民の方からも好評を頂いています。

座長　昔自分のいた大学のイメージですが、学生向けにバイトの情報を掲示したりなどは。

Ａ委員　それも検討したのですが、安心して薦められるかどうかというところです。公立大学ですので。ずっと学生部のほうで検討しているところですが、今のところアルバイトは公的なものしかできないことになっています。

Ｃ委員　私は地域おこし協力隊の方とお話をすることが多いのですが、とてもレベルの高い方が入ってこられているなというのは感じます。ただ、地域が「こういうことをしてほしい」と求めていても、協力隊の方は何をすればいいのかわからないというような、温度差のようなものを感じることが多いですね。具体的に言うと、地区にあった食堂などが高齢化でどんどん閉まっていますよね。地域の人はそういうところを残してほしいと思っているのに後継者がいないからということになると、そういうところに協力隊の方をピンポイントで呼び込んで、豊岡ならではのことをつないでいけるようなことができればいいのになと思っています。

座長　地域おこし協力隊の方が何をすればいいかわからないというような状況がありますか。みんな目的を持ってやっていると思いますが。

事務局　基本的にはミッション型といって、こういうミッションをするために来てくださいということを伝えて、応募のあった方を選考しているので、何をしていいかわからないと言われるとちょっと…。

Ｃ委員　少し語弊があったと思います。要は、地域の方の「こういうことをしてほしい」という思い、そこに入ってもらえたらどんなにいいだろうということです。

事務局　今、委員が言われたのは、地域の大切なお店などで後継者がいなくてなくなってしまう、それを継ぐ人が出てきたらいいなということだと思いますが、地域おこし協力隊として受け入れることもできますし、豊岡市は継業バンクという継業を支援したりマッチングしたりする取組みもやっていますので、そういったことも併せてやっていくのも一つの方法ではないかと思います。

Ｄ委員　専門職大学の今後の方向性について、学部・学科の再編とありました。どのような再編の選択肢があるのかお伺いしたいです。

Ａ委員　今は芸術文化と観光を一緒に教えていますが、定員増をするときには何らかの再編が必要で、観光学部と芸術学部で分けるなど、いくつか案は出ています。多くの学生がまちづくり・地方創生に非常に関心を持っていますので、例えば観光まちづくり学部や、アートマネジメント系志望の学生も多いですから、そういう学部名にするということを検討しています。

Ｄ委員　先ほど福知山市と豊岡市で、どの産業に従事している人が多いかというのがありましたが、やはり製造業というのが大きいですね。大学名が「芸術文化観光」ですから、当然そういう方向に行くのだと思うのですが、何か製造業に人材として残ってくれるような、そういう方向性というのは難しいんでしょうか。

Ａ委員　　もともとは観光とものづくりという方向も検討されたかと思いますが、やはり福知山と似たものを作っても競合してしまって、なかなか大学の特色が出せない。これだけの倍率があるのはやはりオンリーワンだからなので。理念的な話になって申し訳ないですが、戦前に国立大学ができて、それで強い国家を作ることができた。戦後にできた公立大学は地域に必要な人材を育成する大学で、看護や福祉、今は情報系ですね。情報系は福知山がすごく立派なものを作っています。本学はもちろん観光で地域に必要な人材を育成するのですが、もう一つはまちづくりのような、地域の明日を創っていく、新しい雇用を創っていくような大学を目指していて、そういった意味でのものづくりや雇用、事業継承といったことを学んでいます。職人を育成するような技術大学校ではないので、そのあたりは区別していったほうがいいかなと思います。例えば農業やグリーンツーリズムなどで学科を作れないかというようなことなど、それぞれの地域で要望はありますので、どのように大学を発展させていくかは、３市２町の首長とともに話をして進めていくということです。最終的に県知事がイエスと言わないとできませんので、そこは戦略的に進めていきたいと思っています。

Ｄ委員　　今の製造業はどんどん様変わりしていて、ＩＴなどいろいろなジャンルの人材が必要とされていますので、ぜひ今後の選択肢に加えていただければ。

Ａ委員　　デザイン系は特に有望だと思いますし、鞄関係には就職する学生がいると思います。国立の富山大学芸術学部のデザイン科から、数年前に経産省のキャリアになった人がいるんです。企業だけでなくて、今は官公庁もデザイン志向ですので、センスのある学生が欲しいという企業があれば、当然就職はしていけるかなと思っています。

Ｅ委員　　専門職大学の文化観光に関しては、こちらには観光地がたくさんありますので、就職は順当に進んでいただけると思います。芸術文化に関してですが、毎年80人の卒業生が今後出てきます。学生さんとお会いする機会があったのですが、そのうち、芸術文化の分野に進路を持っている人が７、８割とかなり多いということで、そういった方々が地域に就職できるのか、学生たちが求める分野の就職先が今後確保していけるのかというのが心配です。

Ａ委員　　本学はプロの俳優や演出家を養成する大学ではなくて、そのことは入学前から受験生には詳しく説明をしています。それだったら東京の専門学校や劇団に入ってくださいと。４年間芸術を学んで、もちろん俳優や演出家、劇作家になる才能があって努力を惜しまない人の後押しはしますが、それは学年に２、３人です。そのことは学生に繰り返し言っていますし、学生も理解しています。それ以外の芸術を支える側ですね、これは当然地域だけでは雇用は賄いきれませんので、東京・大阪・神戸などに出ていったり、地元に帰りたいと考えている学生も多いので、これを引き留めることはできないです。観光業だけは特別豊岡に就職があるというだけの話ですが、実は観光業にもライバルは多くて、本学の学生たちもＪＡＬやＡＮＡに入れるだけの学力を持っているので、ＪＡＬやＡＮＡよりも城崎温泉が魅力的かどうかということです。繰り返しになりますが、私が「残りなさ

い」ということは言えないので、全員が地域に残るということはないです。

副座長　やはり卒業してくる学生たちに期待したい、地域に貢献していただきたいということですが、先ほどＡ委員のおっしゃったとおり、本当に地域の頑張りによって、残ってここでやっていこうと思ってくれる学生が何割残るかということだと思います。

もうすでにいろいろなプロジェクトを通じて地域との関わりが生まれてきているということで、１年次はまだ忙しいですが、後半の３、４年次あたりで本格的に地域に出てきて、地域の産業やイベントを通じて交流や学びが生まれて、相乗効果やお互いの学びにつながることになっていくと思います。ただ、私はミスマッチが生まれないかなと懸念しています。

先ほどＥ委員から観光があるから観光は大丈夫とありましたが、観光でそこそこいい人材が生まれてきたとして、あえてチャレンジングな言い方をしますが、地域がそういった人材を使いこなせるのかなという感じがします。今までのような旧態依然としたような経営やビジネスのあり方のところにいい人材が来たとして、その方たちがどのようにその業界で活かされるのかというのは、かなり試行錯誤が必要になるので。そういうことはインターンシップなどで早いうちから職場に入れてみれば、「ここの学生たちはこういう特性があるんだな」とか「やり方を変えてみたら」ということが学びとして生まれてきます。やがて地域としても、自分たちも変わりつつ、優秀な人材が入ってきたことによる刺激も与えてくれてと、このあたりはぜひ地域の業界の方々に頑張っていただきたいと思うところです。

もう一つ、地域おこし協力隊の話です。この地方創生の取組みと地域おこし協力隊がやっていることというのは、基本的には同じ方向に向かっているとは思うのですが、どのような位置づけでやっているのかというのが、ちょっと理解しかねている部分があります。所管が移住・定住促進の課にあるということは、そもそも最初から参加してもらう方たちを移住・定住させるための、お試しのような意味が意図的・意識的に含まれているプロジェクトなのか。あくまでも副産物として活動終了後に残ってくれた方も出てきましたということで、その方たちが一定期間ここで活躍してくれて、何かを残して去る方もいれば残る方もいるということなのか。後者なのだとすれば、今20人、30人くらいはこのまちを去っているわけですが、彼らはいったい何を残していってくれたんだろうと。３年間少し盛り上げてくれたけど、あくまで一過性のものでしたというのでは、相当な金額がかかっていますのでちょっともったいないかなと思います。

Ｆ委員　卒業生の受入れ側の話ですが、大学の先生とも、その話は何度かさせていただいています。どういう仕事をしてもらうのか、どういうキャリアを積んでもらうのかということをちゃんと作っていかないと、就職も難しいかもしれないです。入った後、「自分が思っていたのと違う」ということになるのが一番よくないと思います。これからインターンなどもありますし、学生さんのほうでも現場はこういうものなんだなというのを学ぶと思います。我々受け入れるほうにも、今まで

の派遣のように、人手が足りないからそこを埋めるということだけではダメなんだということを理解していただけると思いますので、いかにそこをこの３年くらいの間にきっちりやっていくかというのが非常に重要だと思っています。

それから、後半の地域おこし協力隊のことですが、ありがたいことに、その後も残ってくれている方が結構いて、そのうちの１人は旅館の若旦那と結びついて、女将さんとして活躍しています。学生さんもそうだと思いますが、地域おこし協力隊の方も、３年間で地域のいろいろな人たちとつながることで、こういう形で生活できるんだなとか、自分の居場所はこうなんだなというのをイメージできると、比較的いい形で残ってくれるのではないかと思っています。

最近困っているのが、マネージメントが難しくて、来られた方が頭に思っておられることと、日々の活動がちゃんと整理されていない方がいるのも確かなんですね。応募するときには「こういう目的で」と来て、指導されるほうは大きなことは言われるが、じゃあ毎日は何をするのかということは、指導の仕方が全然違うところがあると思っていて、やはりそこはみんなで隙間を埋めていくというか、ちゃんとやっていかないと難しいのかなと思っています。

あと、なかなか前に進んでいないことがありまして、派遣の扱いです。今はコロナで人手は余っているのですが、おそらくインバウンドが動き出してお客さんが戻ってくると、また人手不足になってしまいます。そうなると、我々の業界は何とかするために派遣をたくさん使うんですね。コロナ前のときには派遣も取り合いでした。いろいろな観光地で派遣を取り合って、時給もどんどん上がっていくということになって、派遣をどう確保していくのかというのが我々の業界にとっては非常に大きなテーマです。

派遣された後に残ってくれる方もたくさんいるんです。うちでここ数年正社員になっている人は、ほとんどが派遣からなんです。そのまま残ってという方もいるし、派遣で３か月とか半年いて、その後またどこかに派遣に行くんですが、１年くらいしてまた帰ってきたときに社員でという方も結構います。城崎全体で見ると、年間で受け入れる派遣の数は数百人いると思うんですね。その中で正社員のような形で帰ってくる方は結構いると思っています。そういった方々をちゃんと受け入れる方法を考えることは、実は人口増加にとっても大きいのではないかと思います。例えば、受け入れた派遣の方についても外湯の扱いを町民と同じように優遇してもらうなどをすると、時給だけの勝負より派遣を取りやすくなって、それが人口増加につながるのではないかと思っています。

人口増加のきっかけの一つとして、派遣をきちんと戦略的にとらえる必要があるのではないかと思っていて何度か話を出しているのですが、残念ながら前に進んでいなくて。我々も何人くらい派遣で来ていて、実際どれくらい就職しているのかというのを調べないといけませんが、先ほどの地域おこし協力隊もそうですが、ひょっとすると数でいうともっと多い可能性があるのではないかと思っていますので、一度どこかで派遣社員についても戦略的に扱うということを議論いただければと思います。

城崎だけではなく、竹野でも神鍋でもどこの地域でもそうですが、そういった方々が将来帰って就職しようというきっかけになると思いますので。夏季や冬季の短期のアルバイトなどで来る学生さんも結構いますが、そういった方々に将来、豊岡に来てもらえるようなことを戦略として考えてはどうかなと思います。

事務局　Ｆ委員には去年も、100人以上の派遣の方がいるが、そこをマッチングするような手立てを何かできないかと相談をいただき、民間の会社を紹介させていただいたことがありました。そこで城崎温泉の特設サイトを作っていただきましたので、そこを見ていただくよう各旅館から勧めていただくというのが、まずすぐにできることなのかなと思います。

あと、先ほど副座長から、そもそも地域おこし協力隊が地方創生の中でどういう位置づけなのかとありましたが、３年間活動した後はどこかに行ってもらったらいいというつもりではなくて、やはり定着してもらうことをゴールに考えているところです。豊岡市は2014年度から制度を活用していて、先ほど報告させていただいたような実績となっています。

副座長　Ｆ委員がおっしゃっていましたが、地域おこし協力隊の方がマネージメントしにくいというか、行政がお金を出しているとはいえ、性格上あまりギチギチにやらないほうがいいタイプの活動に従事されている。一方で、せっかく費用が掛かっているからには何かしらの成果を出していただきたいしと、ここはちょっと難しいところかなと思います。

事務局　先ほど説明しましたように、2022年度から委託型という形にして、ある程度協力隊の皆さんの自由度を尊重するような仕組みにしました。それと併せてＤＸ化もして、あまり自由にしすぎてもらっても困るし、最低限のやり取りをしながら柔軟な対応ができるような形を取っています。

副座長　Ｆ委員がおっしゃっていた派遣の関連ですが、統計的には把握できていないということですが、ある程度の規模感の把握とリピーターや定着型の人がいるかという把握の努力をしていただけるとありがたいなと思いました。その中で、例えばリピーター型を少しでも定着型に近づけるということであれば、日高町でも実際に行われている例ですが、冬場はスキー場で働いて夏場はキャンプ場で働くというような通年型として確立すると、安定的に１年間働けるということになります。リゾート地で真逆のピークを持っているところ同士が、人材の融通をするということです。ですので、城崎温泉とピークがずれていて相性のいいところを見つけていただいて、そこで共同で雇うというような協定を結んでいただくのも一つのアイデアだと思います。

座長　大学のことについては、専門職大学の卒業生をどれだけ採ってくれるかということがありましたが、やはり受け入れる側も、大学生の新卒者を受け入れるということは相当な体制や覚悟が必要だと思います。それは会社の規模によるかもしれないし、やってみたいことなどいろいろな要素があると思いますが、とにかく大学生に目を向けてもらえる企業になるということが、受入れ側にとっては大事な要素かなと感じます。先ほどＡ委員から、秋田の大学の話がありました。あそ

こもすごくいい大学だという評判は伺っていて、地元に残ってもらうべく作った大学とも聞いていますが、その後を聞きますと、大企業と呼ばれるようなところにどんどん就職しているようですので、やはり大学がよくなれば、企業が求めてきて、学生もそういった企業に目を向けてしまうというのは、いつの時代でもそうだと思います。そういう点では、豊岡の企業にとっても、受け入れられるような体制づくりが大切だと感じます。

それから、地域おこし協力隊に関して、出身地はどこが多いのか。例えば、大都市や中核都市で人口減少の心配のないようなところから来ているのか、それとも豊岡のような地方都市からなのか。

事務局　これまでの委嘱数の累計は77人ですが、関東圏は42％で関西圏が47％、その他が十数％くらいという割合になっています。都市部から地方への人口移動を促進させようという国の制度ですので、そういう結果になるのかなと考えています。関東や関西から来られた方が、もともとどこの出身なのかというところまでは追っていないです。

座長　地方同士で取り合いにならなければいいなと感じたので聞きました。

Ｇ委員　伊根町の若者回復率がすごく高くて、伊根町というとイメージ的には豊岡より小さいまちで田舎でという感じがしますが、そこの若者回復率がすごく高いのはなぜなのかなと思います。その理由がわかれば、豊岡もそこに学んで真似できるところは真似していけば、回復率も高くなるのではないかなと思いました。あと、未婚率が高いのがすごく衝撃だったのですが、私も豊岡市の「縁結びさん」ですので、これから縁結びを頑張っていきたいと思います。

先ほどＡ委員が、学生が卒業後も豊岡に残るかどうかは、地域の皆さんの責任だとおっしゃっていましたが、それはもっともだなと思いました。以前、学生たちにインタビューをしたのですが、ここで学んだことを地元に持ち帰って地元のまちづくりに生かしていきたいという学生が結構いて、やっぱり戻るんだなというイメージはあったのですが、ただ、それは去年でしたので、まだ１回生の方たちです。今年はその方たちが２年目を迎えて、３年４年となっていく中で、豊岡に残って活動をしたいとか仕事をしたい、住みたいと思ってもらえるような、魅力のあるまちづくりをこちら側もしていかないといけないですし、そう思ってもらえるような刷り込みみたいなこともしていただけたらなと思いました。

去年、仕事で学生の声を届けた際に、地域の皆さんからもいろいろな意見を頂いたのですが、しっかりとした考えを持った学生が多いのに大変驚いたという意見がとても多くありました。そのほか、どんな感じになるかわからないから大学や学生とは距離を置いていたが、親しみを持てた、応援したい気持ちになったという意見も頂きました。

地域に大学や学生が溶け込んで距離が近づかないと、なかなか壁を乗り越える力も出てこないと思いますので、地域の方々にもっと身近に感じていただけるように、学生の声を発信できるようなことをまたお願いしたいなと思います。

Ｈ委員　大学の学生と派遣で来られる方というのは、目的もかなり違うと思うので、そ

こはやはり分けて考えないといけないのではないかなと思います。もちろん、派遣で来られる方にそのまま定着していただくというのは、人口増加にはすごくいいアプローチだと思うので、それはそれで統計を取って進めていっていただきたいです。大学の学生は、今の豊岡の中にはない考えを持っている、かなり意識の高い方が入ってきているので、逆に私たちのほうがいい影響を受けるような取組みをしていかないといけないと思います。特に演劇祭は全国的にも注目されていて、私の娘が東京の大学に行っていますが、そこからも一部来ることが決まっています。その方たちがすごく豊岡に注目しているというのは、やはり豊岡にはほかの田舎まちにはない魅力があるということだと思うので、もう少しそこを掘り下げていってもいいのかなと。実際そこに住んで生活するという人だけではなくて、観光客を呼び込む力もあるのではないかなと思います。

Ｉ委員　この会には最初から参加させていただいていて、今日のＡ委員の大学の話が一番ウキウキして明るい感じがしました。

私は子育て支援の場にいますので、そちらのほうの話を聞いていただきたいと思います。計画の中に子育て中の就業促進事業というのがあって、女性がありたい姿に向かっていきいきと働ける環境を増やすとか、プチ時短勤務のことがあります。少し古いですが、内閣府が出している、男女共同参画白書というのがありますが、女性が非正規雇用を選択する理由が、25～40歳くらいのところでは「都合のよい時間に働ける」ということや、「正職員で働ける会社がなかった」、「家事、育児、介護等と両立しやすい」ということが挙げられています。実際、女性は結婚や出産で、豊岡で多いのは夫の転勤で仕事を辞めるんです。それから、家族が病気になったとき、介護が必要になったときなどでも、男性が仕事を変わったり辞めたりというケースはまずないですね。それは女性が子育てや介護に適しているという考え方が未だにあるし、女性もそれを望んでいることがあります。さらに、給料が男性より明らかに低いので、家計を支えるためにも女性が辞めたほうがいいという状況もあって、望んでという場合もありますが、望んでいなくても非正規雇用を選ばざるを得ないという実態があると思うんです。この戦略会議でも、女性が定着してくれるかとか子どもの数を増やしていこうという話は出ますが、実際に子どもを育てるにはすごくお金が掛かるんですね。私が現場で聞くのは、お金が欲しい、子どもが増えたらお金が掛かるんだという声はよく聞きます。そのあたりがちょっと置いてきぼりのままだなという感じがします。

あと、３歳児の保育無償化になってから、一気に子どもを保育園やこども園に入れられる方が増えたんです。すると、自分たちの子育て家庭の周りから子どもがいなくなってしまったんです。自分たちの家庭の周りに子どもがいないので、子どもを保育園に入れないとほかの子どもと接することができない。保育園に入れるためには仕事をしなくてはならないので、時短でもいいから仕事をする。望んでいなくても仕事をしないといけないという人が、私の周りには結構いらっしゃいます。ただ、そのお母さんたちの中でも、働くことで専業主婦のときには見えなかったいろいろなものが見えてきたり、やりがいを感じられたりする方もあ

るので、それはそれでよかったのかなと思いますが、そういった現状があるというのも知っておいていただきたいです。

女性の場合は子どもの成長とともに何に軸足を置くかというのが変わっていくんですね。理想論かもしれませんが、そういうことが受け入れられるような社会になればいいなということを思います。

最後にお父さんのことですが、２月にパパ向けの講座を開きました。その講座に参加している方たちは、みんな子育てに頑張っているというお父さんたちばかりなのですが、ここでの話は妻には絶対に言わないからということがどの講座にもあって、お父さんたちも安心して結構いろんなことをしゃべるんです。その中で、「俺はこんなに外で仕事を頑張って帰ってきているのに、帰ってきたら洗濯物がそのへんにある、妻は子どもと添い寝している、それを見たらどっと疲れが出る」とか、「僕は休日には子どもの遊び相手になっている、皿洗いもしている」というような話がどんどん出てきたときに、最後に２人のお父さんが、「奥さんが子どもと添い寝していて洗濯物が散らかっているんだったら、あなたが畳んだらいいのでは」「あなたが皿洗いをしたらいいのでは」と言われたんです。その２人は家事のスペシャリストのようなお父さんなんですが、そのうちの１人は奥さんがちょっと特殊な勤務をされている方なので、洗濯と料理は全部自分がしていると言っていました。最初からうまくいったのかと聞くと、最初はやはり洗濯物の干し方とか調味料の置き場所などを言われてけんかをしたと。でも、妻と子どものことを考えたら早くごはんを食べさせてあげたい、奥さんのほうも、夫にやってもらったほうがいいから少しのことには目をつぶるようになって、今は全然不満なく、ご主人のほうも自分の仕事だと思ってやっていらっしゃいます。もう１人のお父さんは、奥さんが専業主婦で家事は全部奥さんがされているのですが、そのご主人がすごく細かいほこりだとかカビが気になる人なんです。でも、奥さんが一生懸命頑張って子育てをしているから、そんなに気になるんだったら掃除は自分でしようと思って、奥さんが子どもと遊びに出た２、３時間の間に、家の中を徹底的に掃除されるそうです。同居している自分の両親からは、「嫁さんが外に出たら掃除をする」と言われるんですが、「これがうちのやり方だから口出しするな、僕がやりたくてしているんだ」と。そんな２人の話を聞いたあるお父さんは、その日からとても子どもと遊ぶようになって、遊び方が変わったそうです。また、別のお父さんは、自分は今まで家事をしているつもりだったけど、どれだけ自分ができていなかったかがよくわかったと。

この話は、実はお父さんたちはよその家のことを聞く機会がない、昭和の仕事一途のお父さんの背中しか見ていないので、家庭や子育てに関わるということがどういうことかわからないということなんです。なので、父親たちがよそのお父さんや家庭のことをもっと知ったり意見交換をしたりすることができる場が欲しいなと思いました。

座長　　そういったお父さんがいるのも事実です。ジェンダーギャップ解消を推進していますので、今後そこで一つのストーリーとして伝えるのもいいかなと思います。

Ｊ委員　　地域の子どもが地域の魅力を知らないまま出て行って、そのまま帰ってこない、残っていても知らないまま、帰ってきても知らないまま過ごしている大人もすごく多いのではないかと思います。というのが、地域おこし協力隊や学生の方たちが、地域の方から「ようこんなところに来なったな」と、これは暑さ寒さの関係もあるのでしょうが、複数回言われるんだそうです。なので、大きいフォローも必要ですが、地域の皆さんそれぞれへのフォローというのも必要ではないかなと。地域に対しての意識というものをもう少し変えないと、そういう言葉を聞いて暮らしていると居づらくなってくるような気がしますので。とにかく、地域おこし協力隊も学生の皆さんも期間限定ですので、地域の魅力をどんどんと地域の人から発信できるようなシステムが必要だと思います。

昨日出会った学生さんが、ここに来て１年暮らしているけど、一度もコウノトリを見たことがないと言うので、日高町の山本の巣塔に行ってコウノトリを見せてあげたのですが、ちょうど巣塔から飛び立つところで、「うわ、素敵」と言って帰ってくれました。大きなフォローと細かなフォローがうまくかみ合えば、この地域の魅力ももっと高まるような気がします。

例えば今、六面体のスタンプラリーを実施されていますが、なかなかわかりにくくて浸透していないということを聞いています。そこで、六面体のアドバイザーとか、行きたいところに行かせてあげられるマッチメーカーのようなこともやっていけば、どんどんと広がっていくような気がします。地域おこし協力隊の、いろんな人に助けてほしいという声も聴くのですが、そういった声が届かない。コミュニティを自分たちだけで作りたくないんだ、どんどん地域に出ていきたいんだという人もいるのですが、なかなか接点が見いだせないといったことがありますので、その接点をうまくコーディネートできるようなシステムをぜひ考えていただければと思います。

座長　　六面体については一過性ではなくて、豊岡の６地域の特色がフィーチャーされるような内容になっていけばと思いますので、担当に知恵をお貸しいただければと思います。

Ｋ委員　　新規就農や後継者の問題です。但馬はご存じのように年間通じての農業というのがなかなか難しい地域です。その中で、畜産に関してはものすごい勢いで若い方が就農されています。飼育頭数も、生産者は減っているのですが、一人の方がたくさん飼育するので減っていません。背景に何があるかというと、実は価格なんですね。従来は仔牛一頭で30万から40万だったのが、近年は平均で80万を越していて、これはすごく魅力なわけです。今は仔牛市でも品評会でも、若いご夫婦や農業高校の卒業生で残ってくれている方などで活気づいていて、非常にありがたいことです。地元の両親をそろそろ手伝わないといけないとＵターンで志願される方や、いろんな情報を得て但馬牛を飼育してみたいという方もいます。いずれにしても、自分の両親の下で修行するのではなくて、いわゆる大規模畜産農家の従業員としていったん就職して、そして自分でというパターンになっていて、これは明るい見通しかなと思います。

もう一点は、「たじまんま」のことです。ここは自分で値段をつけられるところなんですね。実は、農産物というのは自分で価格を設定できないつらさ、市場原理があります。例えば自分たちで作ったきゅうりを、肥料が値上がりしたからいくらでないと置けませんなどとは言えないのですが、このたじまんまでは生産者が自分で値段をつけて消費者の方に買っていただくようになっています。

冬場もハウスの中で作ったものを売るのですが、そういったところに地域おこし協力隊の方が来たら指導をするのですが、冬場はどうするのですかと聞かれて、冬場はどこかにアルバイトに行ってくださいということは、なかなか指導しにくいので、冬場の間の農業政策というのを考えて、協力できることがあれば協力していきたいと思っています。

座長　畜産に関しては、バブルのような面もあったかもしれませんが、すごく高値で売れていた、それだけ需要があったということがありました。それが今はコロナで落ちているということなので、なんとか維持していただけるような支援を国にもしていただきたいと思いますが、そのあたりはいかがですか。

Ｋ委員　（コロナの影響で）インバウンドがなくなってどうなるかと心配していたのですが、実は輸出が非常に好調でして、日本に行って柔らかいお肉を食べたいんだけど食べられない、だったら自分で肉を買おうかというのが今のスタイルなのかなと。オリンピックにすごく期待していたのですが、次は万博もありますので。牛というのは、仔牛から肉になるまで３年掛かるんです。３年後を見ながら今の仔牛を競り落とすというのは、非常につらいことなのですが、おかげさまでと言いますか、輸出が好調ですので。これは今後も続くと思いますし、輸出が減った頃にはまたインバウンドで来ていただけるのではないかと。もちろん、日本でも消費していただいています。

それから、後継者の方たちにはクラスター事業というのがありまして、国の助成金を受けて私たちが畜舎を建てて、それを17年間賃貸するという生産者支援の制度で、これを今大いに利用していただいています。

座長　教育関係についてお願いします。

Ｌ委員　豊岡市の地方創生総合戦略に学校教育がどのように寄与するか、その視点でコメントしたいと思います。

全国学力・学習状況調査というのが毎年ありますが、その中に児童・生徒質問紙があります。「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある児童・生徒の割合」がどうなのかということです。いわゆるシビックプライドです。このシビックプライドを高くすれば若者回復率が上がるのではないかというストーリーを持っていて、ふるさと教育を続けようということです。

このふるさと教育は、ジオパークと産業・文化とコウノトリの３本柱で、すべての小中学校でやっているのですが、どうもそれだけではダメなようだと。シビックプライドまではいかないのではないかということで、この３月にある中学校がそのことに目を付けたある実践をしました。この中学校は３年生が170人規模、市内の中学３年生は660人ですから、大体25％がこのように思っているんだろうな

という想定で授業をしています。まず３年生に単刀直入に「豊岡は好きですか」と聞いたところ、90％が好きだと答えた。多いか少ないかはわかりませんが、まあまあな数ということです。「豊岡のことで自慢できることはありますか」が88％で、これもまずまずです。ところが、「将来、豊岡に住もうと思いますか」と聞くと、18％が「はい」、22％が「いいえ」、あとの60％は「わからない」と答えています。この「わからない」あるいは「いいえ」と答えた子たちを対象にしてどのような授業をすればいいのかというイメージを作って、先ほどのジオパークと産業・文化とコウノトリを、それぞれ単体では勉強しているものの、それらをつなぐものがないということに気づきました。そのつなぐものというのはＳＤＧｓの視点であろうということです。そういう目的で授業を組んで、まず最初に「豊岡に住み続けたいと思うようになるためには、どんなものが必要ですか」と聞くと、ショッピングモールなどいわゆる自分の生活しか見ていないような答えが返ってきました。これが１年間の授業を通じてどう変わるかということです。例えば神鍋に行ってフィールドワークをします。今までであれば、ジオパークをずっと歩いて、火山活動でできた風穴などを見て「すごいね」ということだったのですが、そうではなくて、自然は守るだけではなくて使うことで経済や暮らしがよくなってくるという視点で授業をします。あるいは、出石に行って産業や文化を調べると、永楽館や美術館を見学して「とても歴史があっていいまちですね」で終わるのではなくて、観光と経済の両面から学ぶことによって暮らしも豊かになると。持続可能性のためには、単体で自然や文化を見ていてもダメだということです。最後に、「ＳＤＧｓカードゲーム」というのがあって、これは2030年の世界が自分たちの行動によってどのように変化していくかということを、ゲーム形式で体験します。最終的には子どもたちから、「コウノトリや玄武洞など、どうしても自然の保護に注目することが多いが、住み続けるまちにしていくためには経済も回していく必要がある。そのためには、観光に力を入れたり企業を誘致したりすることも必要である。また、高齢化社会になる中で福祉も大切だと感じた」という意見が出てきます。最初にショッピングモールなどと言っていた子たちが、最後の授業が終わった後には、大きな公園、大学、病院、過ごしやすい気温、働ける場所、子育てしやすい環境が必要だと書くわけです。こういった視点でどの学校も続けていって、息の長いふるさと教育にしていくことが必要だということに、小中一貫を始めて５年目にしてやっと私たちは気づきました。

加えて、先ほどから話題になっております専門職大学ができましたので、そこの学生たちと中学生がこういう話をしたら、どういう化学変化が起きるのかということです。また、学校の中へ大学生に入ってきてもらって、例えばワークショップのファシリテーターをしていただくといった可能性もあります。そういった形で大学生をすごいなという目で見ると、先ほどＡ委員がおっしゃったように、大学があることによって進学率が高まったり、あるいは学習効果が上がったりすることにもつながるのではないかと考えています。

Ｄ委員　昨日、１週間にわたった第８回おんぷの祭典が無事閉幕しました。先ほどＢ委

員からありましたように、今年は専門職大学の学生が延べ10名ほどボランティアで参加をしてくれて、本当に明るく賑やかで礼儀正しくて、おんぷの祭典にいい影響を与えてくれたと思います。

８回目となりファンが増えてきたなと思いますし、ファン層も多様化してきたなという印象を持っています。最後に中澤宗幸さんから、ぜひこのイベントを続けてほしいというお話がありました。このおんぷの祭典というのは、コンセプトが『子どもたちが豊岡で世界と出会う音楽祭』です。こういった子どもたちのための音楽祭というのは、日本でも本当にまれだという話でした。また、８回続いていますが、このような小規模な地方都市で８回も続いている音楽祭というのはめったにないという話もされていました。ぜひこの流れを続けていただきたいと思います。

Ａ委員　学生は本当に地域の方に特別にしていただいていて、今のところほぼ全員が豊岡大好き、但馬大好きと言っています。本学にはやはり観光という出口がありますので、それにどうつなげていくか、地域への定着につなげていくかになるだろうと思います。ただし、レベルを下げるという選択肢はないんです。レベルを下げれば地域に就職するのではないかと思われるかもしれませんが、レベルを下げると大学に来なくなってしまいますので、そもそも大学が成立しません。今のレベルを維持してどうやって地域に残るかを、皆さんに考えていただきたいと思います。

それから、Ｅ委員からご意見のあったところですが、芸術系にも一つだけ成長産業があって、それは演劇教育です。例えば、県内で今年は宝塚市も豊岡市に続いて小学校での演劇教育が全校実施になりましたが、私の劇団の団員が教えに行っています。演劇が豊岡の輸出産業になれば、ある程度の雇用は確保できます。

80人なのですごくたくさんの雇用は必要なくて、いろいろなところで少しずつ吸収していただければ、３、４割の学生が残れるだろうと。一つのイメージとしては、数年城崎で修業させていただいて、４、５年で神鍋の空いているペンションなどを事業継承する学生が出てくると一番いいなと思っています。本学は会計の授業なども必修で起業する備えはできていますので、そんな学生が増えるといいなと思っています。

５　その他

第２期豊岡市地方創生総合戦略の改訂について

＜事務局より改訂の内容について説明＞

６　閉会